日本における韓国書籍の翻訳出版事情

李　ソ　ラ*
LEE Sora

はじめに

近年，日本では韓国ドラマや韓国の音楽などが「韓流」と呼ばれ，人気があるということは，もはや周知の事実となっている。日韓W杯の後「冬のソナタ」[i]という韓国ドラマが話題になり，主演俳優のペ・ヨンジュンさんは「ヨン様」と呼ばれ，一大ブームになったことは記憶に新しい。当時は中年女性が中心と言われた「韓流」ブームは，その後，東方神起やKARA，少女時代などK-POPが人気を得るにつれ，若い世代のファンをも獲得している。

大学の韓国語講座にも韓国の大衆文化に興味を持って，韓国語を学習したいと受講する学生が年々増えていることを，教える側からは肌で感じている。そういった学生はモチベーションが高く，独学で韓国語の勉強をしてきている学生も珍しくない。

しかし，一方で日本の書店で韓国の小説をみかけたことがおありだろうか。　本稿では日本における韓国書籍の翻訳状況を紹介し，韓国における日本書籍の翻訳状況と比較する。そうすることで，日本における韓国文化の受け入れの偏りや，日韓の翻訳状況の不均衡を指摘し，そこで見えてくる意義や問題点の考察を試みることにする。

1）韓国の文学作品の翻訳支援

2011年9月，韓国人作家のシン・ギョンスクさんの小説『母をお願い』が日本で刊行された[ii]。この作品は2008年に韓国で刊行されるや，186万部（2012年5月の時点）の大ベストセラーになり，舞台化されるなど大きな話題を集めたものである（ちなみに韓国の人口は約5000万人で日本の人口の半分にも及ばない中，186万部のヒットは大ベストセラーと言っていいだろう）。『母をお願い』は2010年アメリカで『Please Look After Mom』というタイトルで英訳されると，14万部が売れ，ニューヨークタイムズのベストセラー入りを記録し，世界32カ国に版権が売れた[iii]。

アメリカでの異例のヒットを受けて，韓国では「文学韓流」だとして，多いに湧いた。2012年5月，韓国文学翻訳院はアメリカの出版市場で成功できそうな作家を選定し，集中的に出版や宣伝を後押しする計画を発表している。誰がアメリカで成功できそうなのか，それを選定するのは誰か，多いに議論の余地がある計画だが，韓国政府が文学の輸出を後押ししようとしていることは明らかである。上記の韓国文学翻訳院とは1996年に政府により設立された政府傘下の機関で，年間平均60軒の翻訳支援を行っており，2012年度の予算は約5億4千万円にのぼるという[iv]。

他にも民間企業である教保生命系列の韓国大山文化財団も韓国文学の翻訳を支援しており，『母をお願い』が日本語に翻訳される際に，その「韓国文学翻訳支援」を受けていることが日本語版に明記されている。つまり『母をお願い』はアメリカでの成功を受け，韓国の支援をもらい，日本で翻訳出版されたわけである。しかし，同書の帯びに書かれている「マスコミ取材殺到，たちまち3

* 江戸川大学　情報文化学科教授

刷!!」という謳い文句とは裏腹に，あまり話題には昇らなかったのではなかろうか。それに，日本では多くの翻訳作品がそうであるように，最初から文庫本での出版になっている。

要するに韓国は「国をあげて」文学作品の翻訳を支援しているのだが，日本に限っていえば，その成果があるとはいえない状況である。実際，日本でベストセラーになった本は管見の限りでは皆無である。例えば，日本の書店・紀伊国屋が発表している2000年以降のベストセラー・ランキングに韓国書籍は見当たらない。このように，日本の出版界で韓国書籍が占める比重は決して大きくないのが実情である。それに対して，韓国の出版業界において，日本書籍が占める割合は非常に高い。

2）韓国における日本書籍の翻訳出版事情

意外に思われるかも知れないが，韓国で日本小説は非常に人気がある。韓国で日本文学が翻訳され始めた1960年代以降，日本文学は持続的に翻訳され，読まれてきた[v]。中でも村上春樹の知名度は抜群で，新作はすぐさま翻訳出版される。デビュー作の『ノルウェイの森』(韓国では最初『喪失の時代』というタイトルだった）は現在まで売れ続けており，2010年に69刷の販売高を記録している[vi]。2011年韓国の大学図書館貸し出し人気ナンバーワンは『1Q84』だった。それだけではない。春樹以外にも日本の小説やビジネス本，エッセーなど，韓国で売れ続けているのだが，そのことがほとんどの日本人には，あまり知られていない。

実際，韓国の書店の陳列台には日本人作家の翻訳書がずらりと並ぶ。大きい書店には日本小説コーナーが常設されている。人気のある作家は村上春樹以外にも奥田英朗，江國香織，東野圭吾，よしもとばなな，宮部みゆき，恩田陸など多数だ。塩野七海の人気も根強い。日本小説の人気が高まった2006～2007年頃，日本国内の韓国大衆文化ブームが「韓流」と呼ばれるのに対して，韓国内の日本小説ブームを「日流」と呼ばれる[vii]こともあった。

韓国での日本の書籍がどれほど人気があるかを物語るデータを紹介しよう。韓国の大手書店である教保文庫の年間ベストセラー・ランキングを見ると，毎年ベスト30に日本の作品が入っている。

表1　2006年～2011年のベストセラー中の日本書籍（教保文庫）

年度	順位	作家	タイトル	出版社
2006	24	奥田英朗	空中ブランコ	ウンヘンナム
	28	辻仁成	愛のあとにくるもの	ソダム出版社
2007	11	奥田英朗	空中ブランコ	ウンヘンナム
2008	24	中島孝志	20代からの自分を高める勉強法	ランダムハウスコリア
2009	2	村上春樹	1Q84(1)	文学ドンネ
2010	3	村上春樹	1Q84(1)	文学ドンネ
	5	大津秀一	死ぬ時に後悔すること25	21世紀ブックス
2011	7	小池竜之介	考えない練習	21世紀ブックス

(教保文庫の発表をもとに筆者が作成)

韓国内で日本の小説が人気だということは上述の通りだが，表1をみると，小説だけではないことがよく分かる。他にも，ビジネス書や自己啓発書の類いもランキングの上位を占めているのである。そもそも韓国では，海外書籍の翻訳出版が盛んである。大韓出版文化協会の2009年度版統計によると，翻訳書の割合が31％で，最も多く翻訳されたのは日本の4592種だった[viii]。

3）日本における韓国書籍の翻訳出版事情

こうした韓国の状況に対して，日本人の中に，韓国人作家の名前をひとりでも挙げられる人は，どれほど存在するだろうか。

実際に大学で韓国語を受講している100名の日本人学生を対象にアンケートを行い，その結果を表2でまとめてみた。

表2

質問	はい	いいえ
知っている韓国の歌手がいますか	99人	1人
知っている韓国の俳優がいますか？	99人	1人
韓国の本を読んだことがありますか？	1人	99人

（江戸川大学と目白大学の学生100名を対象に）

対象学生は皆，韓国語を専攻しているのではなく，あくまで教養科目として韓国語を受講している。一方で，韓国語を受講していない学生より，韓国の文化に興味を持っている学生の割合が多いことが推測される。その影響もあろうかと思うが，ほとんどの学生がK-POPの歌手や韓国の俳優の名前を知っており，10名以上の例を挙げた学生が半数以上で，中には50人以上と答えた学生もいた。それとは対照的に，韓国の本を読んだことがあるかを質問してみたところ，読んだことがある学生は1名存在した。そして，1名と答えた学生も作家名や作品名は忘れて答えられなかった。比較的韓国に興味があると思われる学生の中で，1名しか韓国の作品を読んだことがないというのは，日本で受け入れられている韓国文化の偏りを語っているものともいえよう。

無論，文化に優劣がある訳ではなく，ドラマや映画，音楽など視覚や聴覚に訴える媒体の方が目に見えた影響力があるのかも知れない。現に，韓国の大衆文化がきっかけで韓国語や韓国文化に興味を抱く学生は年々増えている。しかし，一方で韓国の文学や哲学，歴史に接する入り口としての韓国書籍が日本でほとんど，ないがしろにされている現状は，文化の受け入れという側面でアンバランスな感を否めない。さらに，韓国人自らが語った言葉を翻訳し，文章として読むことは，韓国理解において欠かせないことではなかろうか。韓国語を教える立場としては，大衆文化と同時に，韓国の書籍も日本で受け入れられることを期待してやまない。

残念ながら現在，日本で韓国の書籍を目にすることは容易ではないが，近年特筆すべき変化が生じているので，それを指摘しておきたい。

第一に，韓国のドラマや映画の原作の出版である。一例に，紀伊国屋のネット書店のリストで2012年刊行の韓国書籍の翻訳書を調べたところ（2012年11月27日現在，筆者調べ），62種のうち，韓国ドラマのノベライズ本が7種14冊[ix]，映画の原作が1種[x]であった（なお，ここには韓国語教材，料理・旅行・囲碁・ダイエットなどの実用書，雑誌やムック，マンガなどは含まれていない。また，韓国人作家の作品の翻訳書に限定しており，韓国人もしくは在日コリアンによる日本語での著書は省いたことを断っておく）。さらに，韓国の時代劇を理解するための趣旨とみえる，韓国の歴史書や（上記では省かれていた）時代劇解説ムックなどが多数刊行されており，ドラマや映画をきっかけとする出版が特徴的である。

第二に，日本における，韓国の児童向け学習マンガのヒットは注目に値する。中でも，筆者も翻訳者を務めた，朝日新聞出版の「科学漫画サバイバル・シリーズ」（以下，「サバイバル・シリーズ」）は大人気で，日本の大型書店に行くと特設コーナーが作られており，その成功は「日経トレンディー」（2011年11月号）でも取り上げられるほどである。同シリーズの日本出版の立役者であるリーブルテック社の池田聡史氏によると，2012年11月現在，累計120万部の売り上げだ

そうだ。

一方で「サバイバル・シリーズ」の成功を受けて数社から翻訳出版された，韓国のほかの児童向け書籍は売り上げが伸びず，契約が打ち切りになったと聞く。そのため，韓国の児童書の翻訳出版が一概に日本で成功しているとは言えない状況のようだ。しかし，「サバイバル・シリーズ」は日本における韓国書籍の新たな可能性を示していることは確かである。良質なコンテンツで読者のニーズに合えば，多くの人に読んでもらえることを証明しているといえよう。

おわりに

2012年10月9日，村上春樹さんが海外との相互理解に貢献した功績で国際交流基金賞を受賞した。その受賞コメントで彼は「翻訳作業の一つの役目は文化が特定の地域，時代を超えて力を発揮すると証明すること」であるとし，地理上の国境は摩擦を生み，政治問題を引き起こすが，文化の国境は「心を定めさえすれば，私たちにはそれを易々とまたぎこえることができます」と述べている[xi]。ちょうど同年の夏から韓国や中国との間に勃発した，領土をめぐる問題により日韓，日中間の交流が影響を受けていたことを踏まえたコメントであることは間違いない。

他の国の人が述べた言葉を，自分の母語で読む。それは，他国の人が何を語り，何を喜び，何を悲しむかを考えることであり，地域や文化や時代をも超えた交流をすることである。そうして，本を読むことは，相手を理解することに繋がるものだと信じている。日本の書籍が韓国で翻訳出版され続け，韓国内で日本を理解する読者が増えることを期待する。そして，韓国の書籍がより多く，日本で翻訳出版されることによって，韓国を理解する読者が増えることを期待してみる。

---

i 2003年にNHKのBSで放映，翌2004年に地上波でも放映。

ii 申京淑(シン・ギョンスク)著，安宇植訳『母をお願い』集英社文庫，2009。

iii 韓国の大手新聞である東亜日報のインターネットサイトdongA.comの2012年5月16日付け記事による。http://news.donga.com/3/all/20120516/46274079/1

iv 朝日新聞(朝刊)2012年9月18日。

v 尹相仁・朴利鎮・韓程善・姜宇源康・李漢正著，舘野晳・蔡星慧訳『韓国における日本文学翻訳の64年』(出版ニュース社，2012)に詳しい。

vi 日本貿易振興機構(ジェトロ)「韓国における日本の書籍市場」2012年3月。

vii クォン・ヨンソク『「韓流」と「日流」文化から読み解く日韓新時代』(NHK出版，2010)p.203。

viii 日本貿易振興機構(ジェトロ)「韓国における日本の書籍市場」2012年3月

ix キムウンスク著，ソンヒョンギュン訳『シークレット・ガーデン　上・下』(竹書房)，チスヒョン著，尹京蘭訳『私の名前はキム・サムスン　上・下』(角川春樹事務所)，キム・ジョンミン著，チョジョンジュ訳『王女の男　上・下』(キネマ旬報社)，ノジソル著，佐藤操訳『女の香り　上・下』(竹書房)，チョンウングォル著，佐島顕子訳『太陽を抱く月　上・下』(新書館)，オスヨン著，金重明訳『ラブレイン　上・下』(キネマ旬報社)，『階伯　上・下』(チョンヒョンス著，イソンギル訳，竹書房)。なお，全て2012年刊行。

x 『トガニ　幼き瞳の告発』(孔枝泳著，蓮池薫訳，新潮社)。

xi 朝日新聞2012年10月10日(朝刊)。